

「レオナルドさん……ときめくお名前です、どうか私のパートナーになっていただけませんか？」

「へい美しいお嬢さん！ここにもあなたをときめかせる可愛いデジモンがいますけど！」
年に見合わないコケティッシュさを備えた少女は周りをぐるぐると歩き叫ぶターキモン、本来のパートナーを無視して、レオナルドの頬に手を当てまっすぐに見つめている。

柔らかでどこか危うい眼差しは、人でもデジモンでも雄というモノを捕らえるには腕力等より余程有効だ。

その優美さにレオナルドも吐息を漏らす。

「綺麗な目だ」

「ふふっ、よく言われます。……了承と受

け取ってよろしいですか？」

ドーベルマンを模した体のなだらかな首筋を白い指が伝った所で陽気な声でカットが入る。

「よろしくないよ？レオナルドもそんな素人さんに流されなくてほしいな」

用事を済ませたロベルトが待たせていたレオナルドの所へ戻って来ていた。

レオナルドは何の未練も見せず少女の手から逃れパートナーの側へつく。

「素直な感想であって流されてはいない、素人の単調な攻めにやられる程私は安くない」

「まあ……あんな事を言っておきながら酷い、私では駄目だと？」

わざとらしく身を振る少女にロベルトもわ

ざとらしく溜息をつく。

「いくら美しくてもそんな我儘だけで手に入るのはランクの低い物だけだよお嬢さん？
会ったばかりで「君が欲しい」の一言だけで転ぶ簡単な相手はつまらないだろう？」
容易く靡く心は安く軽い、粗悪な物ばかり手にしても意味はないと男は拳を握り熱弁する。

「手強い相手のガードをこじ開けてこっちを向かせ「自分に本当に必要なのはこの人だったんだ」なんて思わせて物にする方が絶対楽しいし満足感もある！奪う楽しさを味わいたいなら腕を磨きなさい」

「……お説教はよくされますけど、もっと上を目指せなんて言われるのは初めてです」